国文学研究資料館紀要　第一号（一九七五年三月）

式亭三馬の合巻と読本

本田康雄

要　旨　式亭三馬は滑稽本「浮世風呂」の作者として有名であるが、当時の文壇にあって彼はいかなる文芸を追求したのであろうか。また真にこの作者の支えとなった作品は何か。その点では先ず文化三年の合巻「雷太郎強悪物語」の大当りを考えたい。この作品なしには式亭三馬は成立しなかったであろう。また、「敵討安達太郎山」「力競稚敵討」など文化期初頭の悪漢小説、残酷小説で三馬は有名になったのであるが、三馬の作風は「雷太郎強悪物語」と文化五年の草稿「坂東太郎強盗譚」を結ぶ線で考えたい。それはまた文化三年に書き始められた読本「阿古義物語」の中心人物、白波雲平の悪漢像とも共通するところである。これらの悪漢は読本の創作方法を合巻にとり入れたところに生じたのではなかろうか。この三馬の合巻の作風はともかく生涯にわたってみられ、遺稿「雲龍九郎偸盗伝」は楽亭西馬、仮名垣魯文によって書き継がれて幕末に及んでいる。ここに年少者を中心とする庶民大衆の夢が表現されているのではなかろうか。

はじめに

三馬の文芸の特徴ははやく水谷不倒が

……洒落本一変して一九の中本となり、狭斜世界は押拡げられて我が下流全体の世界となりしを、三馬更に一変して江戸町内の世界となし、漸く本来の花柳脈を解脱し、普通の人情を主眼としき、叙事体にて之をなししは此の以前に其磧自笑あれども対話体は三馬が嚆矢なるべし……（列伝躰小説史）

と述べている様に会話体による江戸町内の描写にあった。三馬自身が住み、その読者も住んでいる江戸町内の今の生活、「普通の人情」をありありと再現しているのである。即ち「浮世風呂」「浮世床」などの滑稽本の系譜が注目される。

しかし、戯作者三馬の世界の全体を見渡すとこのこと以上に、一は演劇、歌舞伎・浄瑠璃に取材する合巻の工夫、二は合巻・読本を通じてみられる悪漢小説の作成が注目されるのである。特に二の「雷太郎強悪物語」に始まる合巻の作成は読本「阿古義物語」、「魁草紙」（遺稿）の作風とも重なるところがあって、これらの作品が戯作界にあって三馬のかけがえのない支えとなり、生涯にわってこの様な作品、作風の実現を追い求め続けたのではなかろうか。本稿では、この種の作品の考察を進めてみよう。

一　雷太郎から坂東太郎へ

「雷太郎強悪物語」（文化三年刊）大当りの二年後、文化五年に三馬は同種の悪漢小説「坂東太郎強盗譚（ものがたり）」の草稿を書いた。[1] その初編序に

……先年いかづち太郎ごうあく物語といふ十冊物を出したればお子さまがたの大評ばんにて板元も三馬がしゃ

れぬを嬉しがりはなはだゑつに入りましたしかしかの作意は新らしいといふでもなく今の御見物にはこのやうな腹ではどうだと一ばんさぐって見た所が運よく探り当たのでござります……

とある。ここに述べられている様に、この種の草双紙の読者である「お子さまがた」の好みを先取りして敵討もの全盛の草双紙界に「雷太郎」の一作を投じ、大当りとなったのであった。内容は周知の如く、雷太郎という悪漢の一代記で、十冊五十丁の全場面の約半分は彼と仲間の悪党による惨殺、格闘、切り合い、あるいは亡霊出現の場面で、それを非業の死をとげた人々の遺族が浅草観音の加護によって敵討するという筋にまとめている。この作品の特徴は「……いかづち太郎にもう一ぱいあぶらを乗せたるばんどう太郎……」(前掲初編序)という「坂東太郎強盗譚」を重ねて見ることによって更に確かめる事が出来よう。

初編上下五冊(歌川豊国画、文政七年刊)・中編・後編(共に上下五冊、歌川豊国画、文政八年刊)を通して主人公坂東太郎(実名、荒川刀弥蔵)とその仲間、異婁魔二郎(幼名、次郎吉)、刀堕三郎(幼名、三之助)の行状を追ってみよう。(2)

下総国荒川の貧農、荒川刀弥衛門の家へ盗賊が押入り娘を犯し金三十両を置いて去る。娘は懐妊し、その産の為、死ぬ。この様にして出生したのが刀弥蔵(後の坂東太郎)であり、盗賊、つまり刀弥蔵の実父は筑波五郎という幻術を使う山賊の首領であった。

刀弥蔵は幼時より盗み心あり、また残酷で、ある時、盗みを密告した友人の曲松を大木に縛りつけ大力の三之助(後の刀堕三郎)と共に左右より両手を引き、腕を引き抜いて殺す。また郷士深井業右衛門の家に盗みに這入って捕えられたのを逆恨みし、或日、業右衛門が酒に酔って来るところを鋤でなぐり殺す。かねて業右衛門に恨みを抱いていた次郎吉(後の異婁魔二郎)は或夜ひそかに塚をあばき、業右衛門の居間の縁の下に穴を掘り死骸を逆さまに埋める。

次郎吉は父直助の薬代を求める為、庄家と相談して小磯の宿の色子茶屋へ身売した。しかし庄家はその身代金百両

を持帰る途中、西方寺の山内で盗賊筑波五郎の手下に殺され、金を奪われる。恰度この寺の坊主となっていた三之助はありあう卒都婆で盗賊をなぐり殺し金をとり書置を残して去る。

直助は身を歎いて妻と共に自害、三之助の親も庄兵衛、直助への言訳に首を括って死ぬ。次郎吉は証拠の書置を庄家方よりおくられ三之助を討とうと思い暮らす。

大磯の揚屋の後家は次郎吉の色香に打込み毎夜葛籠にいれて呼入れていた。次郎吉はある夜出来心にて後家をしめ殺し金を奪いなにげない風で葛籠に入って帰る。大磯化地蔵の辻堂で若い者が葛籠をおろして休んでいる処へ後家の家から追手が迫る。

下総を逃げ出した三之助は恰度、化地蔵の後にいたが騒ぎにまぎれ、かの葛籠をさげて逃げる。三之助は道で盗賊に遭い斬り合いとなったが、その盗賊は刀弥蔵であった。二人話しをしているところへ葛籠の中から次郎吉が出てくる。次郎吉はこれまで三之助を親の敵と恨んでいたが、三之助が金を奪ったのは次郎吉の身代金と知らずにした事と分り、刀弥蔵の仲介でこれより三人心を合わせて盗賊となり栄華を極めようと決意する。それぞれ坂東太郎（刀弥蔵）、異婁魔次郎（次郎吉）、刀墜三郎（三之助）と改名する。

刀墜三郎は大磯の傾城を妻とし男子をもうける。或夜、百日もたたない水子が五、七歳の童子と変じ行燈の油をなめる。三郎、子を殺す。（以上、初編）

異婁魔二郎は女に姿をやつし呉服屋で詐欺を働らく。また、愚六という律義な百姓の嫁となったが、愚六に木綿を買いにやり、その布地に傷をつけて取換えにやる。愚六は店で打擲される。その夜愚六を締め殺し呉服屋での傷がもとで死んだと死骸を店へかつぎこみ、代官所へ訴えるといって二百両をせしめる。一方、坂東太郎は金さきのおさだという財産のあるしかし醜女で大力の女と関係している。家へ妾おわかを呼び入れたことから女二人の争いとなる。

おわかは病死したが、狂乱したおさだはなおも死骸と争う。(第二編)

坂東太郎の近所にいばらという貧欲深い老婆と継子小雪がいた。太郎は小雪を見染め口説くが従わぬので一計を案じ婆に小雪を奉公に出すことを勧める。難波の商人が百両で妾としたが、坂東太郎ひそかに奪い、その上で商人に会って娘の行方を問い、恐喝する。

坂東太郎、いばらと金を山分けにしたが、或夜忍びこんで金を奪い婆を殺す。それとも知らず、よるべを失った小雪は太郎と夫婦になる。前の妻おさだが邪魔になるので刀堕三郎に頼んで殺す。太郎、小雪一子をもうける。小雪は太郎の行状を見かねて忠告するが短気の太郎は火いれで面を打ち、小雪は太郎の足に喰いつく。太郎は小雪にその母いばらを殺したのは自分であることを告げて殺し、死骸を子と共に谷底へ蹴落す。

太郎は足の傷が全身にひろがり癩病のごとくなる。毎夜、鼠が現われ血を吸い痛み耐え難い。これは小雪の怨霊のなす業であった。

筑波五郎は鎌倉蛇谷の福富長者の金銀を奪おうとし青砥川の辻堂で見張りに出た手下の合図を待っている。坂東太郎、異婁魔二郎、刀堕三郎も同じ夜福富家へ押入ろうとして筑波五郎に出会う。刀堕三郎、老いた筑波五郎を討つ。坂東太郎等は福富の家の者に斬りたてられ逃げたが、その途中、太郎は筑波五郎の亡霊に会い昔からの話しを聞いた。筑波五郎は天命で術がきかなくなり刀堕三郎に討たれたのであった。太郎は異婁魔二郎と共に親の仇刀堕三郎を討つ。

両人は住家へ帰ったが沢多の亡霊火の車をひいて下り、太郎を載せて虚空へ上る。太郎うめき叫んで苦しむ。異婁魔二郎には業右衛門、愚六の怨霊がとりつき首と胴とはなればなれになる。(第三編)

以上の粗筋によって分る様に本書は強盗、強姦、詐欺、窃盗、殺人などあらゆる犯罪を書いた草双紙であり、またその間には非業の最期を遂げた犠牲者の亡霊や妖怪変化が出没する。各編の主要なところに登場する筑波五郎(坂東

太郎の父）は秩父に山寨を構え近国を俳徊する盗賊の頭で、もろこし明の冷謙の術を得た妖術遣いであり、富家に入て財を奪い窮民を施し助ける。犯罪小説でもあるし怪奇物語でもある本書の構想が各場面の絵組みを支えているのである。

本書の草稿は前述した様に少なくとも主要な部分は文化五年には完成していたであろう。本書の殺伐・残酷な作風はこの年の三馬の合巻一般の作風とも一致する。たとえば本年刊行された「関戸矢二郎牛子魔駄六力競稚敵討」（春亭画）は平方円太夫の家で継母・山柴とその姦夫・台蔵が二人の継子をさいなんで殺し、真相が判明するに及んで円太夫をも殺すという話が全八巻中の四巻をしめている。また「蟒蛇お長嫐草紙」（国貞画、七冊）は幼時より蛇を喰う習慣のあったお長が蛇つかいとなりまた背中にうわばみの入墨をした女侠客となるといった話しが中心であり、また「金花猫婆化生屋敷復讐両股塚」（春亭画、六冊）は化け猫が人を喰い殺し様々のたたりをなす筋をこしらえている。

但し、こういった作風はまた三馬のみならずこの時期の合巻全体にみられる傾向でもあった。

文化五年、「御懸り役頭」から名主へ命じられたという「合巻作風心得之事」が蔦屋重三郎より馬琴あての書状（九月二十日付）に掲載されている。（著作堂雑記）

一、男女共兇悪の事　一、同奇病を煩ひ身中より火抔然出、右に付怪異の事　一、悪婦強力の事　一、女幷幼年者盗賊筋の事　一、人の首抔飛廻り候事　一、葬礼の体　一、水腐の死骸　一、天災之事　一、異鳥異獣の図

右の外、蛇抔身体手足へ巻付居候類、一切……夫婦の契約致し、後に親子兄妹の由相知れ候類、都而当時に拘り候類は不宜由、

というのであるがこの禁止された条々はそっくり三馬の右の合巻の各場面に該当する。特に「坂東太郎強盗譚」は端的に、禁じられた各条に一致するし、「女幷幼年者盗賊筋の事」に至ってはそのまま本書の主題であった。草双紙

の主要な読者が婦女・幼年者であった事を考えるとこの条項については特に厳しく吟味された事も想像されるし、この辺に本書がこの時期に出版されなかった理由があるのかも知れない。

ともかくも、この様な時代の雰囲気の中で三馬が合巻作者として流行に便乗しようとする姿勢も窺われるのである。そして作柄から見ても題名や序文の記述からみても「坂東太郎強盗譚」は明かに「……いかづち太郎にもう一ぱいあぶらを乗せた……」(初編序)合巻であって、文化三年の「雷太郎」と文化五年の「坂東太郎」を結ぶ線に三馬の作風の主流が存しこの様な悪漢小説を主軸とする残酷、殺伐な作風によって草双紙界の第一線の作者として時流に乗って活躍しようとした事が察せられるのである。

なお、附言すれば「雷太郎強悪物語」は三馬が洒落、滑稽を本質とする黄表紙の作風から転身した第一作であって様々の工夫が施されていた。例えば、その主人公の命名の出処となった「雷獣」である。主人公の雷太郎ははじめ「来太郎」という名であったが、落雷の日、雨雲の中から現われたこの雷獣と格闘する。「いかづち」と争ったのは彼一人であるというので一字改めて「雷太郎」と改名したというのであるが、ともかくこの作に必須の一趣向であった。雷獣は朝倉無声著「見世物研究」に紹介されているが、明和二年江戸両国橋の見世物となり以後も江戸、大阪、名古屋でみせている。明和版「震雷記」によると同二年七月下旬に相州両降山に落雷があり、その時捕えた奇獣で鼬に似て大きく色やや黒く頭から尾まで二尺五六寸、晴天の日はおとなしいが、雨や曇りの日には暴れて近寄れないという。

この雷獣は「雷太郎強悪物語」刊行の頃も両国の盛り場の有名な見世物であった。叶福助神の開帳の折の両国を描写した「叶福助略縁記」(文化二年刊)中に

○雷獣じゃ〳〵いけどり〳〵かんなりのいけどりは是じゃせうの物をせうでお目にかけます(ト木戸番大はちまきにてわり竹をたたきたてていふを見おしょう)「気ちがひだんべいそばへよらっしゃるな　おやじ「なにはあ小屋の中でうなり申は家猪(おゐし)だんべへ田畑(はた)を

あらして胆をいらしてなり申さねへいけ畜生づらを銭宝をさんだして見物のするとはでっけいべらぼうだ

という場面がある。田舎者の江戸見物という趣向でユーモラスに書かれているが見世物小屋の様子など想像することが出来よう。読者層周知の両国橋の雷獣に着眼し、主人公来太郎と闘わせる構想に三馬の才を認めるべきであろう。因に文化五年に刊行された曲亭馬琴の読本「雲妙間雨夜月」は巻頭図説（文化四年識）に右の「震雷記」、また「閑田次筆」（文化三年刊）を引用し、享和元年五月十日、芸州九日市の塩竈へ落ちて死んだという雷獣（閑田次筆）を絵入りで紹介している。

「雷太郎強悪物語」の性格は、しかし、この種の思いつきはともかくとして以上みてきた様に文化五年の「坂東太郎強盗譚」へ繋るものであった。その大当りの原因は文化初頭の敵討もの草双紙の流行に三馬が新たに残酷小説、悪漢小説を投じた事によるとみられ、この成功が以後の三馬の作風に大きく関わっていったと思われる。次にこの作風の生まれた背景、関連する事柄などをまとめて考察してみたい。

二　三馬と悪漢小説

曲亭馬琴は三馬の草双紙について

……文化中天明水滸伝とか云写本の俗書にもとづきていたく殺伐なる臭草紙（牛子魔陀六物語の類也）を設けて時好に媚びしかば其名一時に噪がしくなりたり……（近世物之本江戸作者部類）

と述べている。ここで「牛子魔陀六物語」というのは前述した「関戸矢二郎牛子魔駄六力競稚敵討」（八冊、勝川春亭画、文化五年刊）のことで、「式亭雑記」文化八年四月十九日の条に

先年近江屋権九郎殿開板絵草紙合巻に、力競稚敵討全部八冊ものにて趣向は牛子魔駄六関戸矢治郎といふものの

強力物語、只顧嬰童の覧を重とする作意なりしがおもはずも其年の大あたりにて部数他の草紙に比して当年の冠たり

と述べている。時流に乗り大当りを得た作品であった。

馬琴の云う「天明水滸伝」との関係は、その主人公神道徳次郎が筑後国高良山の賊窟を奪うところ、神道の手下筒童が火柱夜叉と組打つところなどを牛子魔駄六の山寨、関戸矢二郎が牛子を討つところに利用している。また悪党の台蔵、山柴が山寨の魔駄六と連絡をとりながら旅宿を営み毒饅頭を喰せて金銭を奪う話は「水滸伝」第二十七回「母夜叉孟州道に人肉を売り武都頭十字坡に張青に遇う」と関係があると思われる。(4) 馬琴はこの「力競稚敵討」などを想起しつつ、三馬の殺伐な作風、その人気を述べている様であるが、三馬のこの種の作品は「天明水滸伝」と関係はあるにしても、それだけで説明するのは不充分ではなかろうか。

「力競稚敵討」にしても、前述した様に、姦婦の継子殺しが相当のスペースを占め、また関戸矢二郎の敵討を書いた作であって、天明水滸伝の翻案といった性格のものではない。牛子魔駄六の山寨などが水滸伝を想わせる程度であるに過ぎない。そういった点で云えば、「坂東太郎強盗譚」の筑波五郎(坂東太郎の父)も秩父の山寨にこもる山賊の首領で同種の人物であった。

溯って「雷太郎強悪物語」と「天明水滸伝」との関係を検討してみよう。雷太郎がお鶴を口説き落すところは「天明水滸伝」の太田徳次郎(後の神道徳次郎)が音羽に恋慕して想いを遂げる条に拠ったとみられる。共に父親にとりいり、一方、従はねば一家皆殺しにすると娘をおどす手口である。また、山口剛氏が述べておられる様に(日本文学大辞典)、雷太郎が、江戸、熊谷、那須、秩父、大磯と活躍する舞台の大きさ、またその山寨や海賊のイメージは「天明水滸伝」と重なるのである。両者の間に関係のあることは否定出来ないところである。

山口剛氏の御指摘は正しいと思うが、そういったスケールの大きい大盗賊のイメージという点から云えば、雷太郎、坂東太郎、牛子魔陀六、などに共通するし、後年の三馬の作品中にもその種の人物が見出される。そして、こういった悪漢像の形成に苦心するところにこの時期の三馬の合巻作者としての成長の根源が見出されるのではなかろうか。勿論、この点については曲亭馬琴やまた山口剛氏の説く様に「天明水滸伝」との関係も考えてみなければならない。しかし、作者三馬の側からみれば状況はかなり複雑だったのではあるまいか。少くとも、「天明水滸伝」だけからこの種の悪漢小説が生まれたとは考えられないのである。

悪漢小説という見方からすれば、「雷太郎強悪物語」と同年に刊行された「敵討安達太郎山」の山賊、安達太郎のことも考えておかねばならない。この作品は鈴木重三氏が指摘された様に（合巻について、大東急文化講座シリーズ、第九巻）中国白話小説「醒世恒言」の第三十三話「十五貫戯言成巧禍」の翻案であり、直接には訓訳本「小説精言」（寛保三年刊、岡田白駒著）巻一に拠るものと考えられる。また後半の部分が同じ「醒世恒言」の第二十二話「張淑児巧智脱楊生」（小説精言、巻三所収）に拠っていることも鈴木氏御指摘の通りである。

「十五貫戯言成巧禍」はすでに馬琴が寛政八年刊黄表紙「墨田川柳禿筆」に翻案した事を水野稔氏が指摘され（馬琴の短篇合巻、明治大学文学部紀要・文芸研究第十一号）、また小枝繁の読本「絵本東嫩錦」（葛飾北斎画、文化二年刊）にこの翻案が含まれていることについて横山邦治氏が論じている（小枝繁の読本一二、国語と国文学、昭和四六年二月号）。特に「絵本東嫩錦」は「十五貫戯言成巧禍」を脚色し、酒乱の兄が討たれ、謹厚な弟がその敵討をするという筋とし、最後に近く、箱根山の山寨で少女の手引きで賊徒の首領となっている敵を発見し、そこに誘拐されている兄嫁を救うという話を置いている。戯言の為に命を落とすというテーマと賊窟を書くという趣向を結びつけているのである。「敵討安達太郎山」は直接には訓訳本「小説精言」に拠って書かれたであろうが、前年に刊行された「絵本東嫩錦」を参

考にしその影響を受けたことが考えられるのである。

三馬が敵討物黄表紙の流行に乗りおくれたことについてはこれまで説かれている通りである。「敵討安達太郎山」巻末にも「近来かたき討のさうし大きにおこなはれいづかたの板元も敵討の本ばかりたのみ申候間当年よん所なく敵討の本少〳〵愚案仕候……」と挨拶している。「おなじみかひに敵討の初ぶたいを御ひやうばん……」とも言っているが正直なところであろう。その初舞台の作品として三馬は写本の実録「天明水滸伝」、訓訳本「小説精言」、読本「絵本東嫩錦」を材料として「雷太郎強悪物語」「敵討安達太郎山」の絵組みを考えたとみることが出来よう。ストーリーの構成は読本と同様の行き方であり、それを単純化して年少者を読者とする草双紙の絵組みを工夫するのが三馬の本領であった。

文化三年に始まる三馬合巻の作風は要するに読本の創作方法の導入と言えるのではなかろうか。これらの作品に登場する悪漢達、雷太郎、安達太郎、牛子魔陀六、坂東太郎は、また山寨にこもる盗賊集団の殺伐残酷な犯罪行為、幻術、幽霊の描写は確かに敵討物黄表紙とは異質である。このことは三馬が年少の読者の好みを配慮しつつ、読本のストーリーを草双紙の絵組みに転換したことを示しているのではなかろうか。そして「雷太郎強悪物語」や「力競稚敵討」の大当りはこの手法を三馬の創作方法の基本として定着せしめ、この時期以降も変る事がなかったのではないか。その点を以下述べてみたい。

三　悪漢を求めて

「雷太郎強悪物語」や「敵討安達太郎山」の刊行された文化三年に三馬は読本「阿古義物語」の稿本を執筆し始めた。同年三月四日の大火に罹災した三馬は江戸を去って数か月間北総佐原に滞在した。「流転数回阿古義物語」(文化七年

刊、四巻五冊、豊国・国貞画、鶴屋喜右衛門・同金助版）の序及び述意によると三月より六月頃まで佐原の柳斎方にあって、開場より第三回までの稿本を執筆したのである。後に、文化六年秋よりこの稿を継続して四巻、十二回とし翌文化七年に版行している。

第三回までの標題を掲ると、巻之一〔開場〕懐恨江島船、巻之二〔第一齣〕奪媚珠醸禍、〔第二齣〕老狐操冤人、〔第三齣〕蜂王綰赤繩　となるが、この第三齣までに賊徒白波雲平、これを討とうとする鳴部橘内芳美、橘内を棄てて雲平と馴染む大磯の遊女愛寿、狐の怪、橘内の妹薗葉とその愛人実副四郎吉香など主要な人物も登場し、賊徒白波雲平を中心とする物語の構想が大体は出来ていたと思われる。中心人物は明らかに白波雲平である。

「阿古義物語」全巻を通してこの悪漢を素描してみると、彼はもと三河国の賊徒室平四郎重広であり、源頼家の臣・安達弥九郎景盛に追われて相模国に逃れ白波雲平と変名して婆羅門組という盗賊集団の頭となった。雲平は大磯遊廓の愛寿と馴れ染めたが一方、景盛の忠臣鳴部橘内芳美も愛寿に通っている。通いつめて金を費い果した橘内を愛寿は冷くあしらう。雲平は愛寿との酒宴の場にわざと橘内を呼び出し恥かしめる。橘内は怒気心頭に発し、愛寿、遣手、雲平の手下など十人を皆殺しにする。橘内は切腹。人これを呼んで大磯の十人斬りといった。（本書の副題「大磯十人斬」の出処）

白波雲平は橘内の家から恩賜の重宝白鳩丸という名剣を奪い天城山に登る。そこで蝦蟇の妖術に通達する耶魔姫に出会い契りを結ぶ。耶魔姫は妖術で嫉妬に狂う沖津（雲平の妻）をおびき寄せ雲平に斬らせる。雲平は蝦蟇の妖術を得るための仙丹として沖津の生血をのむ。耶魔姫の正体は実は天竺の玉芝道人という仙人であった。雲平に賊主となってこの妖術を人に教えて魔道へ導けと言い残し、多くの蝦蟇と共に天竺へ飛び去る。

以上が、白波雲平の人物像の骨子であるが、「阿古義物語」は重要な趣向の大部分を後編に譲っている。略記すれ

ば(5)――白波雲平は下総国外川浦の岩窟に住み多くの美女を誘拐したが、殺した妻沖津の執着心によって蝦蟇創を病む。阿漕平二(橘内の家来)は阿漕浦に亡主橘内の追善を営み、やがて白波雲平を討つ。――となる。後編は三馬没後の文政九年、為永春水によって六巻六冊(歌川国安画)にまとめられた。三馬が予告した筋書に従って故人の意企を忠実に敷衍した作である。

「阿古義物語」を仕立てる為に三馬は大いに他作者の読本を利用した。この点については、後藤丹治氏の「読本三種考証」(学大国文第六号)の「第三阿古義物語」に詳細な考証があり参照すべきである。また謡曲、浄瑠璃なども参照したと考えられる。そして、天城山にこもる賊主、蝦蟇の妖術遣い白波雲平こそは三馬の創作であり、この様な悪漢の登場は敵討をとり合わせた点も含めてこの時期の三馬の合巻の作風と一致するのである。

曲亭馬琴は「鬚鞭(えんば)」で本書を批判し「すべての趣向神道徳次とかいふ盗賊等が事を作り設たる写本、天明水滸伝といふものを本にするとおぼし」と述べている。前述した合巻「力競稚敵討」についての発言と一致する。「天明水滸伝」には「高良山賊窟普請の事」を初めとして山寨にこもって悪事を働らく賊徒が書かれており、それと白波雲平との共通する雰囲気を馬琴は読み取ったのであろうか。三馬の合巻についても読本についても馬琴は同じ趣旨を述べている。大まかな感想として理解しておくべきであろうか。

合巻のみならず読本「阿古義物語」においても三馬は露骨に悪漢小説の手法を用いた。しかし、「雷太郎」や「牛子魔陀六」などの作風を読本に延張する企ては失敗に帰し三馬は読本執筆の手がかりを失ったとみられる。「式亭雑記」に「此よみ本はづれ」とある様に売行き悪く、この年の秋九月に売り出す予定であった後編四巻の刊行は中止された。三馬の読本が遺稿「魁草紙(きがけ)」を除けば、「阿古義物語」一種に止まったのは様々に考えられるであろうが、一つには悪漢、盗賊集団、山寨の絵組みを中心とする三馬のいわば悪漢合巻の手法が読本には全く通用しない事を知ら

されたこの時の体験に基づくものであろう。

三馬の合巻執筆は文化三年2種、四年2種、五年9種、六年9種、七年10種、文化八年以降は年間3～5種、晩年まで刊行し続けている。文化五年以降は歌舞伎、浄瑠璃に取材する情話風の作品が多くなった。しかし、三馬は晩年まで以上みて来た様な悪漢小説に関心があったし、それと関連して「敵討安達太郎山」にみられた様な中国小説を合巻に仕立てる努力も散見される。次にその点を考察してみよう。(6)

三馬は文政三、四年に合巻「松竹梅女水滸伝」前後編を刊行した。文政五年閏正月に没した三馬が最後にものした合巻である。前編自序に

天竺にては仏説の三尸虫、唐山にては小説の水滸伝、我朝にては玉藻前の条を取り、姐妃おばァの諢名さへ、こは馬鹿らしい遊里訛、傾城気質の好悪を、一寸見なんし今茲の稗史、浄瑠璃歌舞伎の模様ならず梨園似貌の流俗ならず、些新き物語、……(7)

とある如く、本書は三馬得意の演劇依存の作品、従って情話物語ではなく、庚申の年、庚申の日時に生まれた双子の盗賊、三つ子の傾城の奇しき運命を柱に筑波山白浪谷の賊窟や蟒屋敷の惨劇を描いて「女水滸伝」と題したのである。

三馬はこの作品でこれまでの自作合巻の各種の場面を要領よく利用した様に思える。鎌倉蛇が谷に住む蛇塚蛇子右衛門の残虐は「蟒蛇於長嬲草紙」(文化五年刊)にあったし、姐妃と諢名されたお梅の残忍は「長壁姫明石物語」(文化六年刊)、「玉藻前三国伝記」(文化五年刊)にすでに描かれている。特に、筑波山麓白浪谷の盗賊の首領でまた海賊の張本でもある磨針太郎はこの作品の中心人物といえるが、それは「雷太郎強悪物語」や「力競稚敵討」に何場面も描いたところであった。

本書の冒頭にあすのの原の農民耕作が庚申堂の青面金剛に一子授かる事を祈るところがある。三年後の庚申の夜、

数多の人夫が庚申塚を打ち砕く。泥の中から石の唐櫃が出てくる。蓋を開くと実は一枚の石板でその下の深い穴から一道の白気舞上り、三筋のひかり物となり傍の耕作の妻の口へとび入る。妻懐妊する、という場面である。この部分はいう迄もなく「水滸伝」に拠ったのであり、耕作は耕太尉に応じている。しかし、「水滸伝」との一致は主としてこの冒頭の部分だけで磨針太郎の山寨の如きは三馬の合巻に頻出する類形的なもので「水滸伝」との関係を云々するまでもない。本書の挿話は前後編六十五丁を通して頗る変化に富み、合巻の娯楽的魅力を感じさせるが、多くの筋がないまぜられ各種の場面が提供されているとはいえ、その中心をなすものは山寨の盗賊集団の首領でありまた海賊である磨針太郎であった。三馬が生涯の最後に制作した長編合巻に悪漢小説の手法を用いた事が注目されるのである。

また三馬は前述した様に読本「阿古義物語」に失敗し、その後も読本の作がない。読本はあまり得意でなかった様にみえるが、しかし、当時の小説の諸ジャンルの中で最も本格的な文芸であった読本にはやはり執念をもっていた様で、遺稿として「魁草紙」を残した。以下この読本を中心に三馬と読本、またそれに関連して中国小説の合巻化について考察してみたい。

「海精奇談魁草紙」(五巻・五冊)は歌川国安画で文政八年乙酉に鶴屋喜右衛門、河内屋太助から版行された。本書の序文また「戯作六家撰」の関係記事によれば、稿本は文政三年には完成していた様で、挿絵を歌川豊清、歌川国貞に依頼したが実現せず、その為おくれて結局遺稿を国安画で出版することとなった模様である。

本書は、巻之一、床下乃義士窮客の為に剣を飛すこと　巻之二、奸女が舌頭に鼠平義に負く話　巻之三、姦兒を逞して頑夫其身を斃す話　巻之四、淑女が一箭暗に赤縄を繋ぐ話　巻之五、羽束身を汚して却て身を清ぐ話――の五巻より成る。すべて「今古奇観」の忠実な翻訳で人名、地名を変更しただけである。[8] 原話を列挙すれば巻之一、二は同書第十六話「李研公窮邸遇侠客」(醒世恒言に同じ話がある)、巻之三は第二十四話「陳御史巧勘金釵鈿」(古今小説)、

巻之四は第三十四話「女秀才移花接木」（二刻拍案驚奇）、巻之五は第二十六話「蔡小姐忍辱報仇」（醒世恒言）となる。

この中で「今古奇観」第十六話は浅井了意作「狗張子」（元禄五年刊）巻七「飯森が陰徳の報」に翻案され、また第二十六話に拠った作品としては村田春海の「竺志船物語」（文化十一年刊）がある。しかし、「魁草紙」は原話に極めて忠実であってこれらの翻案作を利用した形跡はない。原文に拠ったのであろう。

三馬はこれまでにも前述した「敵討安達太郎山」に続いて、中国小説に取材する合巻を制作している。中国小説に関心がなかった訳ではない。その点について述べてみよう。

文化六年刊「七難即滅七福譚」（四冊、豊国画、鶴屋金助版）にも二か所中国小説種とみられる話がある。その一は冒頭、盗賊安達太郎が粟洲宗助家に押入るが妻女に会い恩を感じて一物もとらずに去る。かねて宗助と仲の悪い本荒萩左衛門家へ盗賊（安達太郎）がはいり主人を殺して物をとらずに去ったが、その妻女の証言で宗助は無実の罪に問われる、という処は「敵討安達太郎山」から出ている様である。その二は、宗助は旅先で苦労を続けた後、路銀をかせぎためて故郷へ帰る。途中、旅人に薬をのませて馬に変えている家に泊まり、やっとの思いで逃れ出る、という処で、これは「河東記」の「板橋の三娘子」（古今説海所収）が焼餅をすすめて旅人を驢馬とする話を翻案したのである。

また、文化七年刊「おやのため孝太郎次第」（上下各二冊、北川美丸画、西宮春松軒刊）は暉峻康隆博士著「江戸文学辞典」が早く指摘する様に「初刻拍案驚奇」第三十三「張員外義撫螟蛉子包竜図智賺合同文」の翻案である。この作は「小説粋言」（沢田一斎訳、宝暦八年刊）巻之四に収められているので、直接にはこれに拠ったものであろう。原拠作の題名「包竜図智賺合同文」を「青砥英智賺合同文」に改めて本文・挿絵の冒頭に置き、また原拠作の詩をそのまま文中に掲げている。人名、地名その他に変更を加えただけで、原拠作に忠実な翻訳と考えられる。

同じく文化七年刊「婚礼三組昔形福寿盃」（五冊、北川美丸画、西宮新六版）は「喬太守乱点鴛鴦譜」（醒世恒言第八話、今

古奇観第二十八話）の翻案作である。直接には訓訳本「小説精言」（岡田白駒訳、寛保三年刊）巻二に拠ったのであろう。原拠が宋時代、景祐年間、杭州府の話であったのを「順徳院の御時源実朝公天下を護り給ふ鎌倉繁栄の頃」鎌倉桐が谷の出来事とし、作中人物名を変えた外は忠実な翻訳と考えてよい。曲亭馬琴の中本形読本「小説比翼文」「文化元年刊）中にこの「喬太守乱点鴛鴦譜」に拠るところがあったことが報告されているが、この読本にヒントを得たのであろうか。(9)

以上の様に合巻の処女作「敵討安達太郎山」（文化三年刊）に続いて、ともかくも合巻に中国小説をとり入れようとする工夫の跡がみられる。直接には訓訳本「小説精言」四話中の三話、「小説枠言」五話中の一話に拠り、あるいは他作の読本を使ったであろうが、その種の努力が「今古奇観」を翻案した遺稿「魁草紙」にまで及んでいるのである。

本稿の冒頭で述べた様に三馬は滑稽本において江戸町内の今の生活を描写し、また草双紙合巻において歌舞伎、浄瑠璃の世界を書き、読本風の悪漢小説を制作した。そのいずれもがこの戯作者の世界をよく物語っている。しかし、戯作者として文筆家として世に立ってゆく上で三馬を支えたものは何か、また三馬自身どういう文芸を求めたのか、という事になるとさらに限定して考えてよいのではなかろうか。

先ず悪漢小説、残酷小説であった「雷太郎強悪物語」の大当り、年少の読者大衆が予想される。この事がなかったら作者式亭三馬の成立は考えられないのではあるまいか。また草双紙の作者として人気を得、作品の量産を続けながら、同時に当時最も本格的な文芸であった読本に近ずこうとする努力、中国小説の研究など一流作者への途を生涯にわたって模索している。「浮世風呂」「浮世床」も勿論人気を博した中本であって三馬の代表作と認められる。しかし、同時に草双紙作者の視点から読本や中国小説に関心を抱き続け、特色ある合巻を量産したことは作者三馬の基盤とし

て確認しておく必要がある。

最後に合巻「雲竜九郎偷盗伝」に触れて本稿の結びとしたい。本書は三馬遺稿で「坂東太郎強盗譚」中編（文政八年刊）に左の予告が掲載されている。

此さうしは雲竜九郎虎王丸とてふたりのとうぞくのかしらふしぎの妖術をおこなひたかひに力を争ひまたいろいろの強悪をなしのちに大勇士の手にかかり終に術やぶれ二人とも亡ぶるといふことをお子様方のきゃうくんにすらすらとわかるやうに書たる勧善懲悪のものがたりなり

とあるが、大略この通りの内容で、初編、二編が文政十年、三編、四編が文政十二年に西宮新六から版行された。「坂東太郎強盗譚」に続いて、雲竜九郎、虎王丸という大盗賊の悪行を書いた犯罪小説、残酷物語であって「雷太郎強悪物語」以来の三馬合巻の作風が想起される。本書刊行の後、安政四年に楽亭西馬（西宮新六）が模案増補[10]して「雲竜九郎偷盗伝」（角書き、佐上入道千匹犬　優賊虎王千人美女）初、二編を出し、以後六編まで続刊、そのあとを仮名垣魯文が引継いで慶応三年刊の十編まで継続出版している。

「雷太郎」「安達太郎」「牛子魔陀六」「坂東太郎」「磨針太郎」、さらに「雲竜九郎」と続いた三馬悪漢合巻の世界は門人楽亭西馬、また仮名垣魯文という作者を得て幕末まで絶えず新しく表現され続けたのである。

洒落本、滑稽本、人情本系の当代社会に取材し目前の世相を描写する小説はいわば演劇の世話物にあたり近代の小説を読みなれた我々にはとりつき易い感じがする。しかし、読本、合巻となるといわば時代物であって文学としては鑑賞が困難である。「浮世風呂」をはじめとする三馬の滑稽本が当時から評判を得、その描写の技巧が後々にまで伝えられた事は評価しなければならないが、草双紙の伝統、その戯作界における勢力、庶民文化に及ぼした影響などを考えると「雷太郎強悪物語」から「雲竜九郎偷盗伝」にいたる草双紙合巻の執筆を「浮世風呂」にまさる三馬の偉業

として認めたい。近世の年少者を中心とする巾広い庶民大衆の夢がここに表現されているのではなかろうか。

注

(1) この作は文化四年刊「箱根霊験蹇復讐」の巻末に予告され、また中編巻頭に「文化五年戊辰草稿成文政八年乙酉春発市式亭三馬作」とある。遺稿として文政七、八年に西宮新六から版行された。

(2) 拙著「式亭三馬の文芸」三三七頁に全編の梗概を掲出した。今、便宜上、大要を述べる。

(3) 鈴木重三氏は文化元年、二年頃の流行を説いておられる。(合巻物の題材転機と種彦、国語と国文学、昭和三六年四月号)

(4) この話は近世実録全書、第九巻「天明水滸伝」には見出せない。直接、「水滸伝」の訓訳本に拠ったものか。今後、検討したい。

(5) 第五、八、九、十、十二各齣の作者附言による。

(6) 歌川国貞画、山本平吉版。文政三年に前編上下六冊、翌文政四年に後編上中下七冊が出ている。

(7) 人の腹中におり、その人の過失を庚申の日に天帝に告げる。

(8) 巻之一、二、ならびに五、については後藤丹治氏の御指摘がある。(読本三種考証——桜姫全伝・月氷奇縁・阿古義物語——学大国文、第六号)

(9) 水野稔「馬琴の短篇合巻」(明治大学文学部紀要文芸研究、第十一号)

(10) 「此稗史は故人本町庵の著述にして三十余年前文政度の出版なりしが其頃火災にて彫板焼失せし故世上に製本すくなくさるを錦昇堂の主人その古本を貯へありて是に聊増補を加へ僕に模案せよと望む……」(三編巻頭、楽亭西馬)